


今 月 の 一 冊

元木更津市教育委員会教育長 西村 堯 選

鳥類学者だからって、鳥が好きだと思ふなよ。

川上 和人 著 ・ 新潮文庫

ISBN978-4-10-121512-9

590 円 + 税

久しぶりに、ポピュラー・サイエンスを味わおうと、本書を読み始めた。もちろんサイエンス・鳥の生態についての驚くべき知見を得たことは言うまでもないが、それよりも何よりも、著者の筆の運び、文の巧みさに幻惑されてしまった。

私に言わせれば、鳥類学者になるより、漫才、コントの作者になった方が良かったのではないか、と思うくらいである。

鳥類学者らしく、まさに tweet（鳥のさえずり）の如く、よく舌が回る。

二、三紹介しよう。

私がバイクに乗るには相応の理由がある。それは鳥類学者だからだ。
鳥類がバイクのシンボルであることは疑うべくもない。ホンダ、ハーレー、モト・グッチ、バイクのロゴにはしばしば鳥の翼がはためいている。
これは、バイク業界から鳥類学への熱いラブコールである。

(p.76)

私の知る限り、動物は足が多いほど不快性が増し、少ないほど美しい。ムカデは100本、クモは8本、ゴキブリは6本、ドブネズミは4本、鳥類と美の女神アフロディーテは2本。どう考えても鳥類と女神が美しい。もちろんバイクが四輪車やダンプカーよりカッコ良いことは言うまでもない。そうでなければ、スティーブ・マックィーンもトム・クルーズもミッションの遂行にバイクを使ったりしない。

(p.79)

…… 鳥とバイクが、二足歩行と見目麗(うるわ)しきという共通点を持つことはご理解いただけたはずだ。実はこの2点には強い関係性がある。それは、機能美という言葉に集約される。

(p.80)

バイク（著者が偏愛する）と鳥類と、一見似て非なるものを並べて、その機能美を説く練達の文章力に脱帽である。

皆さんは、糞と尿のどちらがお好きだろうか。どちらも捨てがたいが私の場合は糞である。きっと皆さんにも好みがあることだろう。いやはや、考えているだけでワクワクする。

(p.108)

ワクワクするのは川上先生だけで、読者としては、いきなり「糞と尿のどちらが好き」と切り出されても、返答に困ってしまう。こうやって読者を困惑させておいて、次のように続く。

観察とは、湯煙の向こうに透けて見える黄桜カップ姐（ねえ）さんのような、朧（おぼろ）げで儚（はかな）げな存在なのである。

そんな観察に比べて糞はなんとも魅力的なサンプルである。

(p.109)

鳥の研究の中で糞の重要性は分かるが、なんでいきなり、ここで「黄桜カップ姐さん」が出てくるのか！？

こうした鬼面人を驚かすような筆法で、読者をひきつけ、棒腹絶倒、また、クスクス笑いながら著者のペースに巻き込まれてしまうのである。

著者の文章力の紹介はこのぐらいいして、サイエンス（鳥の生態）の方に移ろう。驚いたり、感心したりしたことはたくさんあるが、私が特に興味を持ったことを一つだけ紹介しよう。

小笠原群島のオガサワラヒヨドリは、分析結果によれば、沖縄南部にある八重山諸島のヒヨドリに由来するとのことだ。伊豆諸島あたりから南下してきたものではないとのことである。

日本の西端から東端に向けて 1800km、月の半径相当の距離を飛んできていたわけだ。神武天皇肝いりの東征ですら直線距離にして 500km に満たないのだから、大したものだ。

(p.186)

（またまた神武天皇などが登場するのは、先に述べたとおり！）

さらに、小笠原群島の南に位置する火山列島に生息するハシブトヒヨドリは、本州または伊豆諸島に由来していたとのことである。

そして小笠原群島と火山列島の間では全く交流がなく、遺伝的に異なる集団になっていた。群島と火山列島の間はわずか 160km、鳥がうまく風に乘れば数時間で到達できる距離だ。当然ヒヨドリも両地域で近縁だと思っていたが、そうではなかった。

(p.186)

まだまだこのほかに、「死んだふりの科学」や「鳥目（とりめ）は本当か」など、興味深い話が次から次へと展開される。後は、お買い求めのうえ、ご堪能ください。

題名からもじって言えば、「鳥類学者だからって、クソまじめだと思ふなよ。」

ぜひ、笑いながら自然科学の探求を。

なお、同じ著者の「鳥類学者 無謀にも恐竜を語る」（新潮文庫 670 円＋税）もある。

今月の一冊 （令和 2 年 12 月号 第 162 号）